平成３０年１２月１８日（火）

老球の細道４５３号

ほめ上手

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

先日山梨県のバスケットボール女子強豪高校のコーチが選手に対する暴言等のパワハラでコーチ職を解任された。これほどパワハラが色々な競技で問題視されているご時世にもかかわらず、わがバスケットボール界ではもまだまだ後を絶たない。スポーツ庁によると、指導者の暴力、暴言などで保護者からスポーツ庁に寄せられる相談で最も多い競技がバスケットボールらしい。

思い起こせば、私は出会った指導者に暴力とか暴言を受けた記憶がない。高校で出会った生涯の恩師、菊地長康先生は実にほめ上手だった。選手をほめて、ほめて、ほめまくり、中学時代さほど能力もなかった選手たちをやる気にさせて、メキメキチーム力を向上させていた。会津高校バスケットボールでは菊地先生が指導していた当時は４年連続県大会優勝から３位までを毎年キープしていた黄金時代だったのである。

菊地先生が怒ったところは私が３年間在籍する中で１回しか見たことがない。ある選手が練習をチャランポランやっていた時である。普段叱らない先生が怒った時の姿はそれはそれは恐ろしかったことを今でも覚えている。菊地先生からほめて育てることを学んだ私は、ほめることの下手な指導者で、怒ってばかり指導していたことが今でも悔やまれる。

坂下高校時代、県大会にも出場できなくて悪戦苦闘していた時があった。上杉、福地君がまだ１年生の頃である。ところが３月春休みにある「会津フェステイバル大会」において突然会津地区のトップに躍り出た。皮肉にも私が東京に出張して留守の時であった。代わりに私の長男がベンチに入り指揮を執ったのだが、保護者からは「息子さんのコーチのおかげで子どもたちが伸び伸びプレイできました」と皮肉をいただいてしまった。その時自分のコーチングがいかに選手を威圧していたかを反省させられたものである。

『ほめ上手　叱り上手』〈本明覚　マネジメント社〉という本には次のようなことが書かれてある。「叱り、ほめるを通して、相手の成長、発展を楽しむというように考えてみるのはどうだろうか。楽しむという心のゆとりをもって人を育てるということは、感情的に怒鳴らないし、お世辞ぼめをやらなくなるように思う」。

叱ることも場合によっては必要であるが、ほめることのほうが優先されるのではないだろうか。半世紀も前に私は褒め殺しでバスケットボールを大好きになり、今でも続けている。ほめるチャンスを見逃さず、大げさすぎるくらいほめあげることで選手は自信を持つ。

前著では「ほめるタイミング」を次のように記している。

①良いことをした時。特にそれが小さくても反復された時
②他の人と違った独創的なやり方をした時
③ものの考え方、価値観について自分なりの主張をした時
④チーム全体のことを考えた行動をした時
⑤心の良さを示した時

ほめられた経験を持つというのは精神的に貯金をするようなものであると言われる。人を育てることの原点は、人の心を開き、人を感動させ、信頼関係を強固にするところにかかっている。「ほめる」ことはそのための重要なコミュニュケーションであると思う。